

## 立山の天狗伝説と岩嶺寺中道坊の「天狗様」

細木ひとみ

### はじめに

平成31年4月、当館の加藤基樹学芸員が岩嶺寺中道坊の旧宅で資料調査中、居間の神棚にあった小祠を発見した。中には白布に包まれた怪しげなものが籠められており、これを中道坊では「天狗様」と呼んでいるという（写真1）。この「天狗様」の白布をとると、長さ約28.5cm、最大幅約14.3cmの、顔を人工的に削って眼窩をあけ、頭部の骨が頭巾のようにも思える、まさに「天狗」という頭骨が現れる（写真2～4）。手が加えられているところから、「天狗に見えるように仕立てられた」とも言えるであろう。

この天狗様について、現当主のお話では、「いつごろからあったかのことは詳しくわからないが自身の小さいころにはあり、神棚のように御神酒などが常に置かれていた」<sup>(1)</sup>というが、それ以上の詳細は何もわからないということであった。

「立山の天狗」については、江戸時代の書物にもその伝説が残っていることから、早くから多くの参詣者に知られており、信仰の対象であったことが考えられる。しかし、それを証明するような実物資料が現存しておらず、当館でもこれまで参詣者の記した参詣記・道中記や「立山曼荼羅」に描かれている天狗でしか、紹介することができなかったのである。

令和になり、偶然にもこの夏の特別企画展は「立山の不思議」をテーマにした「立山ふしぎ大発見!？」展を開催し、立山の天狗伝説を紹介することにしていただけにもあり、早速ご当主にお願ひして、この天狗様を初公開させてもらうことにした。この発見と初公開については、富山県の地方紙・北日本新聞の7月12日朝刊でも大きく取り上げられ、「立山の宗教者が布教の道具として用いていたのではないか」と紹介されたのである。しかし、発見されて間もないこともあり、特別企画展では「不思議なもの」としての紹介でとどまってしまった<sup>(2)</sup>。

そこで本稿では、立山で初めて発見された、岩嶺寺旧中道坊の「天狗様」について紹介するとともに、中道坊家と「天狗様」との関わりについても考えていきたい。



写真1 中道坊旧宅の小祠  
(加藤氏撮影)



写真2 天狗の頭鼻骨（正面、個人蔵）



写真3 天狗の頭鼻骨（側面、個人蔵）



写真4 天狗の頭鼻骨（後面、個人蔵）

## 1. 立山の天狗伝説

「はじめに」でも述べたように、立山山中には天狗が棲んでいるという伝説があり、「天狗平」「天狗山」といった地名もある。そこでまず、立山の天狗伝説を紹介したい。

寺島良安編著の『倭漢三才図会』68巻（正徳3年〔1712〕成立）<sup>(3)</sup>には、

森尻<sup>ナノリ</sup>ニ<sup>ニ</sup>智明坊ト云者有リ。性<sup>ウマレツキキョウマン</sup> 驕慢ニ而、俄<sup>ホエル</sup>ニ聲、牛ノ吼如ク、遂ニ天狗ト為リ。自ラ光蔵坊ト号、市ノ谷ニ棲ム。劔山刀尾権現、之ヲ逐出。退キ去ル時、一ツ爪ヲ墮ス。宝物ト為リテ、今に存ス。

と記されており、「畜生原で森尻の智明坊という、生まれつき驕慢（おごり高まって人を見下し、勝手なことをすること）な者が、声が牛のようになり、ついには天狗となった。自ら光蔵坊と名のって市ノ谷に棲んでいたが、劔山（劔岳）の刀尾権現に退去させられた。その時に落とした一つの爪が宝物となっている」というのである。そして、同書には、雄山山頂の立山権現御本社（現在の雄山神社峰本社）の什物の一つとして「天狗ノ爪<sup>ツメ</sup>一ツ 光蔵坊之手爪」として記されている。

市の谷に住む光蔵坊の話は、佐藤季昌（佐藤月窓）の『立山紀行』（寛政10年〔1798〕）<sup>(4)</sup>にも、

むかし、森尻の智明坊といへる僧のありける。ひととなり驕慢にして、この山にのぼる。俄に声、牛の吼ゆるににて、遂に魔界に入りて、みづから光蔵坊と名乗りてこの市の谷に住む。刀尾権現、遠くしりぞけ給ふ。時に一の爪を落す。

とあり、ほぼ同じような話で記されている。そして、このような物語を聞きながら市の谷に到ったと言うのである。さらに、本社の神宝の一つに「光蔵坊ノ爪」とある。

またこの他に、「森尻の智明坊（智妙房）が牛になったが、懺悔して心を改めたため、空海（弘法大師）により救済され、『光蔵坊』という天狗となり、天狗山に棲みついた」という伝説や「獅子ヶ鼻に魔物（悪い鬼）が棲み、禅定人を困らせていたので、空海が獅子ヶ鼻岩の岩端に座り、七日七夜調伏の護摩を焚いて退治した」という伝説もある。どちらも空海（弘法大師）が、悪さをしていた天狗または魔物を調伏したという話である。

天保2年（1831）に立山へ参詣し、獅子ヶ鼻岩の岩屋で荒行を行った佛山禅苗の「立山参詣記」<sup>(5)</sup>にも、「弘法大師ハ、千年已前ニ末世衆生济度、且、鬼神退治之ために三七廿一日之間、護摩修行被遊、其灰を以て口中へ被納候と伝聞」と記されており、禅苗も「弘法大師が鬼神退治のために護摩修行した」と聞いているのである。ここでの鬼神が天狗であるかどうかは判然としないが、それでも空海（弘法大師）と天狗伝説がこれらの話より結び付けられ、「立山曼荼羅」にも悪い天狗を空海が調伏する様子や天狗山に棲んでいる天狗が描かれている<sup>(6)</sup>（写真5～9）。



写真5 「立山曼荼羅」吉祥坊本  
（部分・獅子ヶ鼻岩、当館蔵）



写真6 「立山曼荼羅」佐伯家本  
（部分・獅子ヶ鼻岩、個人蔵）



写真7 「立山曼荼羅」善道坊本  
(部分・獅子ヶ鼻岩、当館蔵)



写真8 「立山曼荼羅」大仙坊A本  
(部分・天狗山、大仙坊蔵)



写真9 「立山曼荼羅」大江寺本  
(部分・天狗山、当館蔵)

さらに、雄山山頂にある御本社では、什物として「天狗の爪」があったことは、『和漢三才図会』以外にもいくつかの参詣記や道中記などからうかがえる。

『立山遊記』<sup>(7)</sup>は、加賀藩の儒者である金子盤蝸が、天保15年(1844)6月22日に金沢を出発し、7月8日に戻るまでを記した、立山への道中記(参詣記)である。金子盤蝸は、同書において、

絶頂ニ上レハ浄土山ハ低ク見ユ。本社ハ石垣ヲ三尺斗モ積上ケ、其上ニ六尺ニ九尺ノ社有リ。立山権現神ナリ。(中略)今春、社ノ東ノ角ノ板ヲ五六寸斗突破リ、又扉ヲ破リテ神体ヲ地上投出シタリ。如何ナル事ニテ如此ヤ。岩倉僧ヨリ此旨御作事ヘ注進ス。依テ先ツ神体ヲ富士社ヘ移シ置也。扉ニ梅花ノ御紋著ク。材木モ結構ナリ。○扉ヲ開キ宝物ヲ開帳ス。古銭大小百五六十文、六寸斗リノ古鏡一面、又一寸五分斗ノ天狗ノ爪石有リ。鏡ハ形如此、背ニ劔有リ。左右ニ仙人六人雲上ニ立ツ。上ニ貞観何年ト云文字在レ共、字体壊シ、明カナラズ。銅質ニ三百年ノ品ニシテ、華物ニハ非サルヘシ。先年富山町人ヨリ帰附スト云。又女ノ角、馬ノ角ト云物有リ。余請テ此レヲ見ハ、女ノ角ハ赤色ノ曲玉、馬ノ角ハ白キ曲玉ニテ、女ノ角ヨリハ形大也。都テニ雙有リ、又堪棒腹、又二寸斗ノ丸ク印ノ形ノ如キ物ノ絹ニテ包タルヲ一人ツ、皆頂ヘ印ス。僧ニ問ヘドモ不知何物也。

と記しており、雄山山頂の立山権現社の宝物の一つに一寸五分ばかり(約5.7cm)の「天狗ノ爪石」があり、参拝者に見せていたことがうかがえるのである。

しかし、立山の名所が記載されており、内容から正徳期(1711~1716)ごろに記されたと考えられる「立山道名所」<sup>(8)</sup>には、峰本社について、「五ノ越則御宝前南向也。東ハ不動、西ハ弥陀、中ニ御宝蔵。但し和銅銭、駒引銭、人ノ角式つ、馬ノ角式つ、鬼ノきば壺つ、佐伯有頼左衛門どのくまおいし丸(餅)さはノ尾矢一本、鳥したノ矢壺つ、小判十両斗有」とあり、「天狗の爪」は記されていない。

そうすると、立山権現本社において天狗の爪が什物(宝物)の一つになった時期があるようにも思える。

## 2. 岩嶺寺中道坊家と「天狗様」

岩嶺寺中道坊で祀られてきた「天狗様」については伝承もなく、判然としないことが多かったが、その後の調査中に、箱の蓋に「立山村岩嶺寺村／[ ]／天狗頭鼻蓋／佐伯志津摩佐伯等□」、箱の側面に「中



新川郡立山村岩嶽寺／佐伯等／天狗頭骸骨篋」と墨書されている箱も見つかった<sup>(9)</sup> (写真10)。納戸に御膳などとともに収納されており、発見した際にはこの箱の中にも様々な陶器が納められていた。そうすると、天狗様が本当にこの発見された箱に入っていたのかも、墨書された頃に中道坊が天狗様を祀りだしたのかも判然としない。それでも、「天狗頭骸骨」「天狗頭鼻」と記されていることから、何らかの関わりがあるとは考えられる。

そこで、ここでは、箱に墨書されている「佐伯志津磨」「佐伯等」を中心に、中道坊家と天狗との関わりについて考えていきたいと思う。

中道坊文書に昭和8年に記された『中道坊歴代』<sup>(10)</sup>を見ると、「佐伯志津磨」氏は明治16年(1883)6月に59歳で、「佐伯等」氏は昭和6年(1931)11月に75歳で亡くなっており、それぞれ、42代、43代の中道坊家の当主を務めている。41代の当主・白善は天保13年(1842)5月に亡くなっていることから、42代の佐伯志津磨氏は江戸末期に18歳で当主になり、「行應(応)」と名乗ったとみられる<sup>(11)</sup>。また、佐伯等氏は行年より安政3年(1856)に生まれたと考えられる<sup>(12)</sup>。そうすると、「天狗頭鼻」は、安政3年(1856)から明治16年(1883)の間には中道坊家にあったということが考えられる。そして、「立山村」は明治27年(1894)からの名称であるから、この箱の墨書はそれ以降に書かれたとも考えられるであろう。

それにしても、先述したように、「立山曼荼羅」の中には立山の天狗伝説を基に描かれた天狗がいる。しかし、中道坊に現存する「立山曼荼羅」には、獅子ヶ鼻岩に弘法大師のみが描かれているだけで天狗の姿は描かれていない(写真11)。岩嶽寺宿坊家の衆徒は、江戸時代後期に出開帳などの勧進活動を行っており、中道坊の「立山曼荼羅」もそういった際に使用されたものと考えられるが、年代も記されていない。

もう一つ、中道坊と関係することがわかっている「立山曼荼羅」が「立山曼荼羅」立山博物館A本である。この軸裏には3枚の貼紙があり、右幅の裏の上側(①)に、

越後高田住、佐伯氏田中者、立山開山慈興大上人之連枝たる事、立山寶帳に分明也。依之御山傳記の面を書写するものなり。

文政二年卯五月 立山別當岩嶽寺 中道坊龍善(花押)

とあり、下側(②)に「佐伯清左衛門佐代(印)／自画(印)」とある(写真12)。また、左幅の裏に、先祖佐伯有若左衛門之嫡子有頼公は、大寶の頃越中の國の守護職たりし間、和光の結縁によつて、佛道を修行し立山開山 慈興大上人とそ申し、しかるに有若左衛門の舍弟正清ハ越後の國に住す。是、我家の祖なり。世かはり歳移て、享保の頃、時の主佐伯氏を憚り、田中となし、紋所扇に日の丸を三ツ



写真10 天狗頭鼻骨の箱と蓋 (個人蔵)



写真11 「立山曼荼羅」中道坊本 (部分・獅子ヶ鼻岩、個人蔵)



写真12 「立山曼荼羅」立山博物館A本の裏書 (①・②、当館蔵)

柏と改む。それより四代を経て、文政二年己卯四月越中立山別当中道坊、越後旦廻として此辺を通りけるに不思議や、我門にて足いたみ、歩行なりかたき故立寄て休息しにけり。其時中道坊申様ハ、此あたりに佐伯氏を名乗者あるやと尋られけり、依之我家に言傳し事とも、彼僧に語りければ、立山御寶物記に佐伯の氏族越後にあるよし。年来尋れとも知れかたかりしを今家系の符合せる事仏神の加護とも謂うへし。猶、此絵図ハ中道坊所持のを書写し、子孫に残す事しかり。

文政二年己卯五月

佐伯清左衛門（印）

佐代（花押）

と記された紙（③、写真13）が貼られており、この「立山曼荼羅」は中道坊の「立山曼荼羅」を文政2年（1819）に書写したものである<sup>(13)</sup>。しかし、この立山博物館A本にも、天狗が描かれていないのである（写真14）。

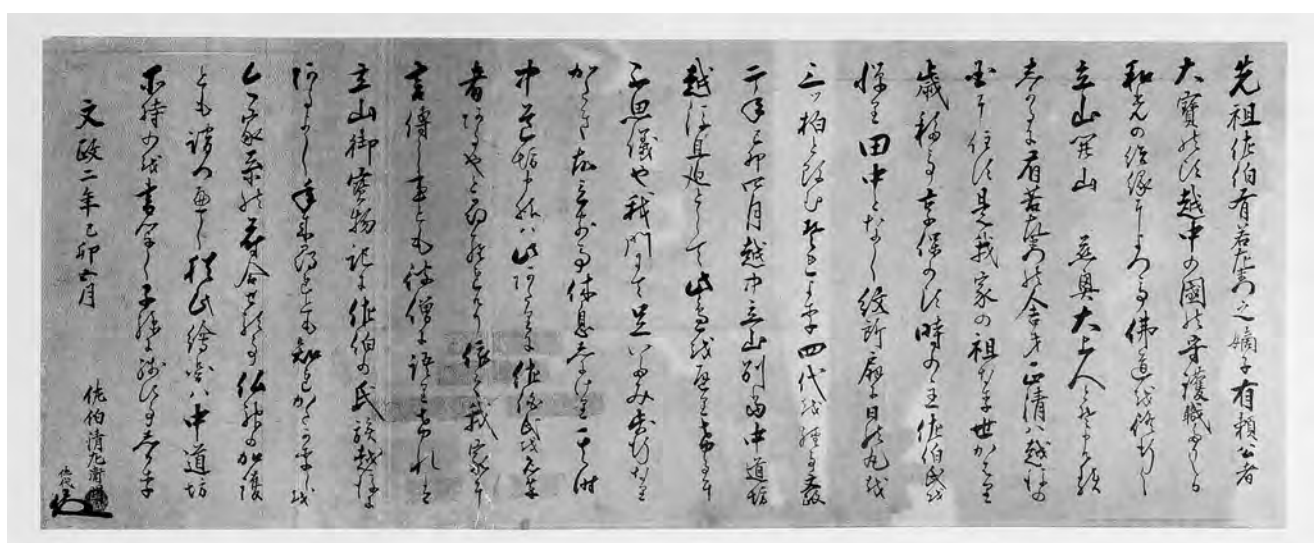


写真13 「立山曼荼羅」立山博物館A本の裏書（③、当館蔵）

さらに、岩嶺寺延命院に伝わり、「立山曼荼羅」の絵解きの種本（台本）ともいわれる『立山手引草』には、

この間が「一ノ谷」に道。これ断悪修善の大行場なり。

先年も飛州より北山石蔵という邪見の者、この所にて悪鬼となり、この「獅子が鼻」の岩屋に住みて諸人を悩す。時に弘法大師、御登山あつて、その鬼を退治のために護摩修行たりしに、恐れ退ぞき、その牙は御宝物となりて、今にあるなり。

と記されており、北山石蔵という者が天狗ではなく、「悪鬼」になったという。また、畜生が原での話についても、

また、左方を「畜生原」と言て、中古奥州板割坂より藤喜の丞と申す者、愚痴にして地獄あることも疑え、極楽と言うことも信ぜず、因果廢無の者なるがゆえに、この所にて生きながら畜生道へ墮ち、駒となり、あまつさい角おえ、その身は畜生原へ放さる。角は御宝物となる。

あるいは同国、安方が殺生の報いによりて、火の雨降りて身にかかり、苦しみも、この所なり。

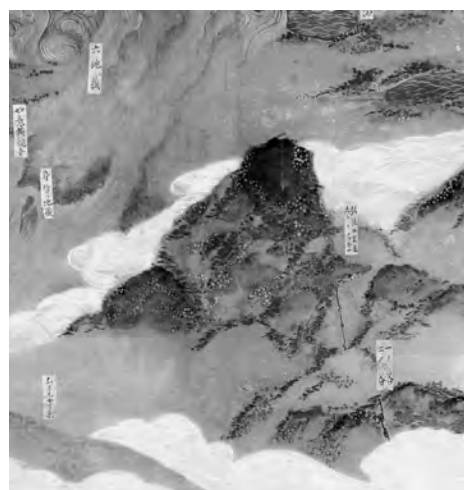


写真14 「立山曼荼羅」立山博物館A本（部分・獅子ヶ鼻岩、当館蔵）



また越中の国、森尻の知明と申す僧、檀主諸共に登りしが、信施を恣にせし罪によって、これもこの所にて罪業を顕わして、生きながら牛となりたりくこれ等の事、『三才図絵』『妻鏡』『善知鳥』等に見えたり。但し大同小異。

と記載されているが、天狗ではなく、「駒」や「牛」になったという。

そうすると、中道坊やその他の岩嶽寺宿坊家と立山天狗伝説との関わりが「立山曼荼羅」などでは見られず、中道坊が江戸末期から明治期になぜ天狗様を祀ったのかは「立山曼荼羅」からもうかがうことができないということである。当時の当主が、何か理由があって購入したのか、あるいは檀家から寄贈または寄附されたということも考えられる。

### 3. 「天狗」とイルカの頭骨

岩嶽寺中道坊の「天狗様」について、南部久男氏（当時、富山市科学博物館）を通じ、山田格氏（国立科学博物館名誉館員）と田島木綿子氏（国立科学博物館研究主幹）に写真で見てもらったところ、写真のため断定できないが「ネズミイルカ」の可能性があるとのことであった。ネズミイルカは、クジラ目ネズミイルカ科ネズミイルカ属で、1.4 m～1.7 mほどの小型イルカという<sup>(14)</sup>。国立科学博物館の海棲哺乳類データベースの海棲哺乳類ストラディンクデータベース<sup>(15)</sup>を見ると、そのほとんどが北海道沖で記録されている。そうするとやはり、中道坊家がどのようにしてイルカの頭鼻骨を手に入れたのかが気になる。それでも、ネズミイルカが富山湾（石川県側の能登半島を含む）でも記録されている<sup>(16)</sup>ことから、より天狗に見える頭骨であったということであろうか。

そこで、他所の、「天狗の頭骨」とするものがどういったものだったのかをここでは見ていきたい。

まず、風来山人（平賀源内）は、安永5年（1776）に『天狗髑髏鑑定縁起』<sup>(17)</sup>を記しており、内容を見ると、「天狗髑髏」とされるものは、平賀源内の弟子である大場豊水が明和7年（1770）菊月<sup>(18)</sup>に携えてきたものとわかる。

昨日天狗を夢む。今朝夢さめて思ふに。けふは廿四日にて愛宕の縁日なればとて芝の愛宕に詣けるに。門前櫻川と号する小流の中に怪しき物あり。拾上て泥土の穢を洗去れば。しかじかの物なりとて筐を開て取出し。けふ此品を得て帰るさの道にて。見るもの皆天狗の髑髏なりとて市をなせども。固俗人の億見證するに足らず。希は先生真偽を辨ぜよと。予諾して門人に告て各其志をいはしむ。一人が曰。これ大鳥の頭なり。阿蘭陀のぼうごる。すとろいすならんと。又一人曰。蠻夷の大鳥たりとも斯まで大には有べからず。これ大魚の頭骨ならんと。反復上下の論。異説まちまちにして衆議一決せず。予曰。これ天狗のしやれかうべなり。門人驚て曰。夫レ倭俗の天狗と称するものは。全く魍魎魍魎を指すなれとも。定れる形有べふもあらず。（後略）

とあり（写真15）、大場豊水は24日の愛宕の縁日に芝の愛宕社に参詣し、門前の櫻川から流れる怪しい箱を見つけて拾い上げたという。箱の中のものを取り出してみると、見るもの皆が「天狗の髑髏」と言ったが、俗人の当て推量ではあてにならず、平賀源内の所へと持参したというのである。そして、その場にいた門人らが「大鳥の頭」や「大魚の頭骨（かしのほね）」と言いが決まらず、源内が「これは天狗の髑髏（しやれかうべ）」としたというのである。同書には、この怪しいものを「天狗髑髏図」として描かれ、「頭大サ六寸余」（約18cm）、「嘴七寸余」（約21cm）、「目のこく成穴一寸五分程」（約4.5cm）、「耳の穴二寸」（約6cm）、「牙五分程」（約



写真15 『天狗髑髏鑑定縁起』内の意見を言い合っている場面（国立国会図書館蔵）

1.5cm)、<sup>(18)</sup>「咽<sup>(のど)</sup>のごとくの穴二ツ」、<sup>(19)</sup>「都<sup>すべて</sup>一尺二寸余」(約36cm)とその大きさも記されている(写真16)。結局は、大鳥か大魚の頭の骨であったかもしれないが、「天狗の髑髏」とされているため、その詳細はわからない。ただし、大きさは中道坊の「天狗様」と大して変わらないように思える。

また、本草漢学塾であった山本讀書室の資料の中に「天狗の頭骨」と同じような資料があったようである。資料整理を行った松田清氏の報告<sup>(19)</sup>によると、「秃鷲<sup>とくしゅうとうろう</sup>頭髑髏」という資料名称で、「寛政九年(一七九七)六月一日、汚らしい田舎の老人が奇品と称して、典医<sup>とんどしゆんどう</sup>百々俊道のもとに動物の大きな頭蓋骨を持ち込み、路銀だけ受け取って立ち去った。俊道が師の小野蘭山<sup>おのらんざん</sup>に尋ねると、秃鷲<sup>とくしゅうとうろう</sup>の頭蓋骨とのこと」と紹介されている。そしてさらに、「小野蘭山<sup>おのらんざん</sup>が秃鷲<sup>とくしゅうとうろう</sup>の頭髑髏(頭骨)、皆川淇園<sup>かいえん</sup>が天狗の骨、章夫<sup>あきお</sup>が鮫魚骨とした頭骨は神奈川県立生命の星・地球博物館、樽創<sup>たるはじめ</sup>学芸員の写真鑑定によって、カマイルカの頭骨と判明した」としている。この頭骨を「天狗の骨」と考えた人物がいるというのが興味深い。

昭和初期には、谷崎潤一郎が高野山増福院で天狗の頭蓋骨を見ている。これについて「天狗の骨」<sup>(20)</sup>と題して、

高野山第三十七世執行検校覚海上人(御堀河帝貞應二年八十二歳にて示寂)は天狗になつたと云はれるが、この上人の住んでみた華王院といふお寺が現今は増福院と云ひ、上人に関する古文書を蔵してゐる中に、天狗の頭蓋骨といふものがある。(中略)

見たところ人工で拵へたり接ぎ合はせたりしたものでないことは確かだが、どつちが正面だか前だか後ろだか手に取つてみてもよく分からない。太古の怪獣の骨ではないかとも思はれるが、その方面の専門家に見せても一向説明がつかないといふ。先年大阪の三越だか白木屋だかの展覧会に出品したことがあり、その後もずみぶいろいろな人が拝観に来る。西洋人などもやつて来て、丹念に写真を取つて帰るものもある。尤もこれが天狗になつた覚海上人の遺骨だといふ譯ではない。上人の伝記その他関係文書にも此の骨のことは何も記してないし、別に縁起等も残つてゐない。ただ天狗には縁の深い此のお寺の什物としていつ頃からか傳はつてゐるのである。

と記し、妻の丁未子が写生した正面図と側面図を掲載している。増福院では、天狗になつたといわれる覚海上人との関わりで、いつの頃からかわからないが天狗の頭蓋骨を所蔵しているようである。そして、増福院の天狗の頭蓋骨の大きさを掲載された図から見ると、嘴または鼻の付け根の幅を2寸位(約6cm)、先端の幅を1寸位(約3cm)、付け根から先端までの長さを7寸位(約21cm)とし、頭部分(側面から付け根までと思われる)の長さを5寸位(約15cm)とある。増福院にこの「天狗の頭蓋骨」についてお尋ねしたところ、現存しているとのことであった。ただし、「蔵にしまっており、秘仏のようなものでお披露目したりはしていない」ということで、どのようなものなのかは不明である。それでも、「たぶんイルカの頭骨ではないか」と教えていただいた。

また、岩手県平泉町の中尊寺峯薬師堂にも、「カラス天狗の頭骨」があるという。こちらにも小型のイルカの頭骨のようである<sup>(21)</sup>。この天狗について、中尊寺にお尋ねすると、「明治ごろ、当時の住職が珍しいものとして手に入れたものではないか」と教えてもらった<sup>(22)</sup>。

「天狗の頭骨」とする事例が少なく、比較できないが、主にイルカの頭骨を「天狗の頭骨」としたようである。中道坊もイルカの頭骨を手に入れたことにより、「天狗」とし、また「天狗様」として祀ったと推測できる。

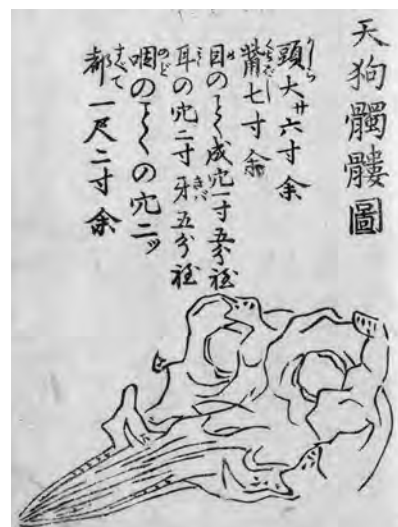


写真16 「天狗髑髏圖」  
(『天狗髑髏鑑定縁起』より)

#### 4. 岩嶽寺中道坊の行應と檀那場

それでは、どのようにして岩嶽寺中道坊はイルカの頭骨を手に入れたのであろうか。

中道坊が、「立山曼荼羅」を持って布教・勸進活動をしていたことは、先述した「立山曼荼羅」立山博物館A本の裏書からもうかがえ、この裏書から文政2年(1819)に「越後高田」周辺を訪れている。しかしこれは、行應以前の当主の頃と考えられる<sup>(23)</sup>。

中道坊行應においては、氷見や能登半島の村々と関係を持っていたことを示す文書がいくつかある。葛葉村(現在の氷見市葛葉)で代々肝煎役を務めた名苗家に伝わる文書群の一つに、嘉永3年(1850)10月の『岩嶽中道坊官位奉加割帳』<sup>(24)</sup>がある。これによると、

嘉永三年戌十月廿四日泊り

立山岩嶽寺中道坊行應

官位昇進奉加入用

一、壹枚白銀 権正僧主

一、同 同 権大僧主

一、同 同 法円<sup>(印)</sup>

一、同 同 阿舍利

ノ

一、五両 行中入用

一、四両貳歩 無住寺入用

但壹ヶ年金貳歩宛九ヶ年分

ノ

銀ニして八百拾八匁

一、三百貳拾七匁 南条組内  
内

七拾五匁 仏生寺村

三拾五匁 鞍骨村

拾九匁 惣領村

三拾目 飯久保村

三拾貳匁 矢田部村

三拾五匁 布施村

拾八匁 深原村

貳拾五匁 下久津呂村

貳拾目 上久津呂村

貳拾目 粟原村

拾八匁 中谷内村

ノ三百貳拾七匁

一、四百九拾目 上庄組内  
内

三拾壹匁 赤羽毛村

貳拾六匁 坪池村

三拾目 棚懸村



|  |      |
|--|------|
| 三拾目  | 岩瀬村  |
| 拾三匁  | 老谷村  |
| 拾匁 <small>内五匁戌十二月廿日上ル<br/>五匁八十二月取立</small> | 葛葉村  |
| 内六匁亥十二月被下九月八日取                             |      |
| 拾七匁内五匁上ル                                   | 床鍋村  |
| 拾五匁内四匁上ル                                   | 三尾村  |
| 三拾目内十匁上ル                                   | 日名田村 |
| 貳拾目内七匁上ル                                   | 小久米村 |
| 四拾貳匁                                       | 池田村  |
| 拾八匁  | 見内村  |
| 三拾五匁                                       | 触坂村  |
| 貳拾目  | 日詰村  |
| 貳拾目  | 桑院村  |
| 貳拾三匁                                       | 田江村  |
| 三拾五匁                                       | 早借村  |
| 同  | 上田村  |
| 四拾貳匁                                       | 大野新村 |
| ノ四百九拾貳匁                                    |      |

と記されており、中道坊行應（佐伯志津磨）の官位昇進にかかる費用を南条組と上庄組の村々に依頼し、村ごとの割り当てを葛葉村の新十郎が記録したものとわかる。

中道坊文書にも年代が記されていないが、初穂銀納付の控が3通ある<sup>(25)</sup>。そのうち1通には、

|        |      |
|--------|------|
| 覚      |      |
| 一三拾目   | 大野新村 |
| 一三拾目   | 池田村  |
| 一貳十五匁  | 上田村  |
| 一貳十五匁  | 早借村  |
| 一貳十五匁  | 赤羽毛村 |
| 一貳十五匁  | 触坂村  |
| 一十六匁   | 田江村  |
| 一十六匁   | 小久米村 |
| 一貳拾目   | 日名田  |
| 一貳拾目   | 岩ヶ瀬  |
| 一拾三匁   | 日詰村  |
| 一拾匁    | 三尾村  |
| 一拾匁    | くしば村 |
| 一拾貳匁   | 見内村  |
| 一拾匁    | 床鍋村  |
| 一十五匁   | 桑院   |
| 一拾匁    | 老谷村  |
| 一十八匁   | 坪池村  |
| 一貳十目   | 棚懸   |
| ノ三百五十目 |      |

と、裏に「本川伊左衛門／十六り」と記されている。また、別の1通には、

立山中道坊

一貳百五拾目 奉加

内

|     |           |
|-----|-----------|
| 廿八匁 | 布施村（花押）   |
| 拾七匁 | 深原村（花押）   |
| 廿貳匁 | 下久津呂村（花押） |
| 廿壹匁 | 上久津呂村（花押） |
| 拾九匁 | 中谷内村（花押）  |
| 拾九匁 | あわら村（花押）  |
| 廿三匁 | 矢田へ村（花押）  |
| 廿五匁 | 飯久保村（花押）  |
| 廿目  | 惣領村（花押）   |
| 廿六匁 | 鞍骨村（花押）   |
| 三拾目 | 佛生寺村（花押）  |

ノ貳百五拾目

右先ふりを以割符仕候

とあり、もう1通も同様の村名が記されている。これらの村々は、先に紹介した葛葉村の名苗家文書に記されている村名と同じであり、中道坊の檀那場であったと推測される。これは、中道坊の41代が天保13年（1842）5月に亡くなり、行應が42代目となった8年後のことである。

ところで、中道坊の行應が布教・勸進活動をしていたとみられる氷見市内にはイルカに関する話がいくつかある。文化10年（1813）の『越州産物帳』四<sup>(26)</sup>には、

一いるか 海豚

新川

四季共取申候。

射水

四季二取申候。

氷見

不時に捕揚申候。

さぐいわりいるか

魚津

不時に揚申候。形ハ常乃いるか、頭ほそ長く、色も常乃通ねすみ色ニ御座候。

はらめいるか

魚津

不時に揚申候。形ハ常のいるか、頭まろく、色ねすみ色ニ御座候。

にうとういるか

魚津

不時に揚申候。形ハ常のいるか、頭ふとく、口の内赤くせなのひれ大きに御座候。惣身に白ふりあり。

是丈位ノ貳間迄も揚申候。

とあり、氷見では「不時に捕揚申候」と記されている<sup>(27)</sup>。そして、氷見市栄町にある魚取社は、明治20年（1887）ごろ、池田町の浜続き海岸、現在の余川川の川口南方に広がる栄町の砂浜に、入道と呼ぶイルカが大量に打

ち上げられたのに感謝して建てられたという<sup>(28)</sup>。同じく明治20年ごろ、地蔵町の浜にも大量のイルカが水揚げされたという。このことについては、氷見市立博物館『特別展 人びとのいとなみと動物たち—生活・文化・信仰—』に収められている、小境卓治氏の論考「クジラとヒト」<sup>(29)</sup>に、

氷見地域では、明治20年代頃、地蔵町の浜で大量のイルカが水揚げされた、とする二つの記録が残る（飴田五平1937年）（窪田為次郎1990年）。両記録によれば、同年頃地蔵町の海岸に「ニュードウ魚」が大量に群泳したため、これを一町挙げて捕獲した、という。1頭の長さは15尺（約4.5メートル）ほど、重さは60貫（約225キロ）から70貫（約263キロ）余りだったとあり、1頭3円ほどで600頭余りも売却した、とされる。そのため、町内振舞いとして町内全戸に各1円宛現金が配られたほか、「曳網の者」たちには5円ずつ特別配当がなされた。

その折の売却代金をもって、毎年7月の祇園祭礼の際に花ヤマ、あるいは提灯ヤマとして曳回される町内の曳山が大修繕されたため、地蔵町の曳山は「ニュードウヤマ」と俗称された。ここでいう「ニュードウ魚」は、歯クジラの仲間であるイルカのことをいう。（後略）

と紹介されている<sup>(30)</sup>。また氷見市では、縄文時代を中心とした遺跡からイルカの骨も出土しているという<sup>(31)</sup>。

そうすると、氷見内で布教・勧進活動をしていた中道坊行應が、イルカの頭骨を手に入れたとも考えられる。さらに、中道坊文書を見ると、嘉永年間（1848～1854）に石川郡（現在の金沢市・白山市の一部や野々市市など）の村々に檀那場があったことを示す文書<sup>(32)</sup>とともに、明治9年（1876）8月には能登半島で出開帳を行ったようで、「出開扉宿寺請記」として鳳至郡宇出津村（現：鳳珠郡能登町）の塩谷寺や穴水大町村（現：鳳珠郡穴水町）の来迎寺、鳳至郡時国村（現：輪島市）の岩倉寺の名前がある<sup>(33)</sup>。

そして、桜井徳太郎氏が『日本民間信仰論』で「立山へ行かないうちは一人前といえぬ、というのが内海一帯に唱えられている慣用句でもあった。半島の尖端、三崎村や西海村の青年たちは船で富山湾を横断して越中に上陸、そこから立山へ登ったのである」<sup>(34)</sup>と記しているように、能登半島の先端、三崎村や西海村の青年たちが「一人前いえぬ」として立山へ登ったというのである。

その三崎（寺家村、現在は珠洲市）について、「能登志徴」巻10の珠洲郡・獅子の岩<sup>(35)</sup>の項には、  
 改作所旧記。元禄十六年五月寺家村肝煎等連名書付に、寺家村領之内大泊と申処に、獅子岩と申候石御座候。権現此所へ御渡被<sub>レ</sub>成候砌、被<sub>レ</sub>召候獅子、岩に成候故獅子岩と申候と載せたり。（中略）  
 能登誌に、往古三崎権現獅子に乗て天降り給ふ獅子の、岩と化したるといへり。諺に云伝へるは、或時権現獅子居るかと言ひけるに、江豚といふ魚ありて答へしより、権現の使者海鹿と云へり。今も此魚を食する事を禁じ、もし食すれば三年社参を忌むなりといへり。此事今も伝言して、三崎邊にては食ふ事なしといへり。彼社記にも、當所忌<sub>レ</sub>豚魚<sub>ニ</sub>有<sub>レ</sub>由來<sub>ニ</sub>。若犯時者。有<sub>レ</sub>癡狂癡瘡之憂<sub>ニ</sub>。甚厳也。と載せたり。とある。寺家村大泊にある獅子岩<sup>(36)</sup>は、三崎権現が天降った際に乗っていた獅子が岩になったものだといひ、ある時三崎権現が「獅子居るか」とおっしゃったときに、江豚（イルカ）が答えたことによって、三崎権現の使者が海鹿（イルカ）となったというのである。そのため、この辺りではイルカは三崎権現の使いとして、食べることを禁じられているという。

また、「能登志徴」巻10の珠洲郡・江豚の三崎参にも、  
 四五月比は江豚の三崎参とて、夥敷江豚共海上をおよぎ打むれ来り、三崎の社前へ寄集る事毎年同じ。是神の御使しめ故に、かく群がり来るなりといひ伝へり。  
 とあり、さらに「能登志徴」巻10の珠洲郡・高倉宮にも、  
 此浦有<sub>レ</sub>三島三崎<sub>ニ</sub>。姫島。神島。鬼島。間崎。宿崎。金剛崎。又當所忌<sub>レ</sub>江豚魚<sub>ニ</sub>。有<sub>レ</sub>由來<sub>ニ</sub>。若犯時者。有<sub>レ</sub>癡狂癡瘡之憂<sub>ニ</sub>。甚厳也。又自<sub>レ</sub>古征<sub>レ</sub>伐悪鬼邪神<sub>ニ</sub>數多。其汚血凝而寄<sub>レ</sub>近郷十七村浦々<sub>ニ</sub>。世人之所<sub>レ</sub>知顯然也。尚御當社之神異不<sub>レ</sub>違<sub>レ</sub>舉。云々。

と同様に記されている。高倉宮とは高倉山の嶺上にあり、式内須々神社はこの社で、須々神社の本社だといっており、須々神社は「三崎権現とも称せり」とある。須々神社の社前に、4、5月ごろにイルカが群れでやっ



てくるのは三崎権現の使いだからということである。

これに対して、真脇村（現：能登町）にある高倉神社<sup>(37)</sup>については、「能登志徴」巻9<sup>(38)</sup>に江豚の説話として、

此真脇村は内浦宇出津の磯続にて、漁人のみ居住し年中多獵なる中にも、江豚の獵所なりける。三崎にては、江豚は神の御使なりとて、捕事をかたく禁制とす。此処なる高倉神も、正しく三崎より勸請して同神を祀りたれど、如何なるわけにや此浦は三崎と引かへ神の好み給ふ江豚なりとて、捕揚る処の初穂をまつ神前へ備奉る例なりしが、天保の比にや神主高原氏と、當所上日寺といふ真言の僧と社仕の論起りけるに、此里人は残らず上日寺の檀下なりし故に、各寺僧の方人を成、神主は名のみにて神供等の事、専ら上日寺掌どる事と成し後は、さる魚類を備ふる事もなく過ぎたりしに、如何なる事にや此浦へ江豚寄来らず、更に獵なかりしとぞ。然るに産土子の漁人共も、全く是神の思食に応ぜざりける故なるべしと、再び神主方と成て力を添へけるに、重て双方争論をなし、遂に社寺方の僉議にかゝり、神主の利分と成りて、いにしへに復しけるが、不思議なる哉、其より後は再び江豚も多く捕揚るとぞ。此は其此水野三春話なりける。

と紹介されている。真脇村は宇出津の磯続きのため漁人のみが居住する村といい、高倉神社は三崎の高倉神（須々神社）を勸請した社で、三崎では江豚は「神の使い」と言って捕ることを禁止しているにも関わらず、この浦では神の好みの江豚（イルカ）だと言って捕っている。そして、そのためにその年に初めて捕った江豚はまず神前に供えるというのである。

三崎では海の向こうに見える立山に対する信仰心があり、その周辺で氷見と同様にイルカの頭骨を手に入れることができたとも考えられるのである。

## おわりに

江戸時代の書物には、立山の獅子ヶ鼻岩に棲む天狗の伝説が記されており、その天狗の爪が雄山山頂の立山権現御本社（現在の雄山神社峰本社）の什物の1つとして禅定人（参詣者）に見せていたという。この話の中での天狗は、禅定人を困らせる悪い天狗で、刀尾権現または弘法大師に退去させられたというのである。また、立山に残る「天狗山」「天狗平」という地名は、驕慢な者（森尻の智妙坊）が弘法大師により救済されて「光蔵坊」という天狗となって棲みついた伝説による。そして、これらの天狗伝説は、「立山曼荼羅」にも描かれているおり、檀那場での布教活動や立山を訪れた禅定人に話して聞かされたと考えられる。しかし、立山での天狗についての詳細はわかっていない。

そのような中で、岩嶺寺中道坊の旧宅で「天狗様」と呼ばれる天狗の頭鼻骨（頭骸骨）が発見された。天狗様の頭骨は、「ネズミイルカの可能性がある」とのことであり、国立科学博物館の海棲哺乳類データベースの海棲哺乳類ストランディングデータベース<sup>(39)</sup>を見ると、そのほとんどが北海道沖で記録されていた。それでも、富山湾（石川県側の能登半島を含む）の滑川市沖や石川県七尾市沖でも記録されている<sup>(40)</sup>ことから、より天狗に見える頭骨を求めたのかもしれない。しかし、この「天狗様」がどのようにして祀られていたのか、なぜ中道坊家であったのかは、聞き取り調査ではわからず、入っていたと考えられる箱の墨書を手掛かりに見ていくことにした。

中道坊家42代の「佐伯志津摩（磨）」氏は行應と名乗り、先代が亡くなった天保13年（1842）ごろまでには活動を始めていたとみられ、また、43代の「佐伯等」氏は安政3年（1856）に生まれ、志摩摩（磨）氏が明治16年（1883）に亡くなられたことから、「天狗頭鼻」が天保13年（1842）から明治16年（1883）の間には中道坊家にあったということが考えられた。そして、行應が布教・勸進活動をしていた江戸末期から明治期にかけては、加賀藩内の石川郡や氷見の葛葉村周辺、能登半島の寺院との関わりを示す文書があり、氷見周辺や能登半島からイルカの頭骨を手に入れたように思える。

天狗の頭骨ではないが、能登半島と天狗との関わりでいうと、弄石家である木内石亭は『雲根志』後編三之上<sup>(41)</sup>の「天狗爪石」の項で、

俗に天狗の爪石という物、形爪のごとく長さ一二寸、先尖根に肉着あり。色紫黒、両端鋸齒のごとく実に爪に似たり。雷のおちし跡、或は古き屋を葺かゆると得、又は大石を破りて得る事もあり。大木を切て木に立たるを得る事もあり。能登国七尾近所に稀にあり。佐渡国越後国等にあり。或説に、山亀ありよく木に上る、この物の爪なりと。この説疑し。(中略)又一説にいう鰐鮫の類の大魚の歯なり、是又詳ならず。予長さ三寸、幅三寸なるを蔵す。能登所の口七尾の産なり。石中に得たりと伊勢柳谷貝石山の内石中に大さ式三寸許なるを得たり。今、予、伊勢・能登・越後等より二十枚を集得たり。

と記している。木内石亭は同書において、その正体について「山亀の爪」という説には疑いをもっており、「鰐鮫の類の大魚の歯」というのも詳しいことはわからないと述べているが、自身もつ天狗の爪石20枚は伊勢、能登、越後などから集めたといっている。その中には、「能登所の口七尾」産のものもあるというのであるから、能登半島では「天狗」の存在を信じる者と繋がりがあったようにも考えられるのではないだろうか。

それにしても、中道坊の「天狗様」については推測ばかりで、紹介するにとどまり、はっきりとしたことが依然としてわからないのが残念である。中道坊だけでなく、岩嶽寺の宿坊家の資料についても見ていき、「立山の天狗」について今後も考えていきたいと思う。

#### 【付記】

本稿は、令和元年度前期特別企画展「立山ふしぎ大発見!？」で紹介した、岩嶽寺中道坊の「天狗様」について、展示解説書を基に再度整理したものである。

本稿作成にあたり、佐伯淳氏にご協力とご教示をいただきました。また、中道坊の「天狗様」については南部久男先生より、氷見市のイルカについては氷見市立博物館の小境卓治先生よりご教示いただきました。さらに、古文書解説にあたり、当館主任学芸員の加藤基樹氏より協力・助言いただき、当館主任の吉野俊哉氏より貴重な資料の提供をいただきました。

ここに記して、皆様に御礼を申し上げます。

#### 【註】

- (1) 現当主は昭和31年10月12日生まれ。お母様は、平成24年に死去するまで旧中道坊家に居住しておられた。
- (2) 富山県 [立山博物館] 令和元年度前期特別企画展「立山ふしぎ大発見!？」展示解説書（富山県 [立山博物館]、令和元年7月13日刊）。
- (3) 寺島良安編著『倭漢三才図会』68巻越後・佐渡・越中・信濃、富山市立図書館所蔵。
- (4) 佐藤月窓「立山紀行」（『肯構泉達録』巻之十三所収）。
- (5) 「立山参詣記」は、佛山禅苗が天保2年(1831)6月20日から29日にかけて、立山を参詣した際の様子を記したものである。この「立山参詣記」や立山両大権現に誓った願文、立山の参詣に持参したとされる卷子など、佛山禅苗に関する資料（遺品）は、立山での修行後に居住した、東京都新宿区にある昇龍山観音庵に大切に残されている。
- (6) 獅子ヶ鼻岩に天狗が描かれている「立山曼荼羅」は来迎寺本、坪井家B本、善道坊本の3点、空海（弘法大師）と天狗が描かれているのは立山黒部貫光株式会社本、佐伯家本（※ただし、獅子ヶ鼻岩には弘法大師の姿はなく、「弘法大師護摩所／シシガハナ扇カケ松」と文字銘がある）、宝泉坊本、吉祥坊本、立山博物館D本、立山博物館F本（旧富山県立図書館本）、泉蔵坊本、坂木家本の8点、天狗山に天狗が描かれているのは相真坊B本、大仙坊A本、大仙坊B本、大江寺本の3点である。
- (7) 金子盤蝸著『立山遊記』、天保15年（1844）、個人蔵（立山町郷土資料館寄託）。
- (8) 金沢市立玉川図書館近世史料館蔵。
- (9) 現在は、「天狗様」と小祠とともに立山博物館に寄託されている。
- (10) 『中道坊歴代』は、昭和8年に佐伯尚子氏（現当主の祖母）により作成された。中道坊文書の一つ（個人蔵、NO22-02）。
- (11) 佐伯志津磨（摩）氏は、行年から文政7年（1824）生まれと考えられる。
- (12) 佐伯等氏は現当主の曾祖父という。

- (13) 文政2年(1819)ごろに中道坊が越後国へ出開帳に行っていたことは、天保3年(1832)の「立山大権現他国出開帳并岩嶽寺新規同配札御指留之出訟願書并二始末御有方濟口御請書等扣」(『越中立山古記録』第一巻所収、立山開発鉄道株式会社、平成元年9月20日刊、144頁)に、「近年御免許之上二候歟、文政二年之頃、岩嶽寺を越後国へ出開帳之義は、中道坊・玉蔵坊・六角坊等之人数相企、所々開帳仕り、松之山松代村観音堂ニ而開帳、同村嘉右衛門方宿ニ而御座候。同五月下旬ニ及び、立山之峯開ニ相向候ニ付、一先ツ帰国仕り候。秋ニ入、又候同国へ罷越、高田城下今町等開帳仕り、帰りがけに頸城郡能生宿ニ而開帳仕り、其節、此方坊方之者同駅之定宿ニ泊合、則開帳へ罷越、慥ニ夫々見聞仕候。夫を帰国之砌、同郡糸魚川善集寺ニおみて開帳相勤相済候。」とあることからもうかがえる。
- (14) 国立科学博物館 HP の海棲哺乳類図鑑のネズミイルカ科より。(https://www.kahaku.go.jp/research/db/zoology/marmam/pictorial\_book/list\_phocoenidae.html)
- (15) 国立科学博物館 HP の海棲哺乳類ストラディンギングデータベースより。(https://www.kahaku.go.jp/research/db/zoology/marmam/drift/index.php)
- (16) 註15に同じ。富山市科学博物館『とやまと自然』第34巻夏の号(No.134)に掲載された、南部久男・藤田将人「展示解説 特別展「クジラ」」にも、このデータ等を参考にして作成された表があり、ネズミイルカや同じネズミイルカ科のスナメリやイシイルカが富山湾で記録されていることがうかがえる。
- (17) 風来山人(平賀源内)著『天狗髑髏鑑定縁起』、安永5年(1776)、国立国会図書館蔵。
- (18) 『広辞苑』第6版(岩波書店、008年1月11日刊)には、「陰暦9月の異称」とある。
- (19) 松田清『京の学塾 山本読書室の世界』(京都新聞出版センター、2019年12月25日刊)、35頁・158頁。同書には、山本章夫が執筆した亡羊伝「先人言行録」(未刊、草稿)に、  
 俊道家富。貯方所、古銅器、鱧ノ類夥シ。其内ニ六珍ト称シ、銀蛇、犀尾、含生草、異形石燕、桃絲竹<sup>ほっす とく</sup>、秃鷲<sup>しゅう</sup>頭骨等ナリ。シカルニ百々氏奢侈ヲ極メ、遂ニ零落ス。所謂六珍ナル者ヲ永ク<sup>ぞうきよ</sup>蔵奉スル能ハス、将ニ之ヲ売却セントス。章夫之ヲ聞キ、遂ニ之ヲ購得テ、今ハ予家ノ珍藏トナル。六珍詩画等、之ニ副ス。皆川淇園首トシテ天狗骨ヲ得ル記ヲツクル。其外、原在中、岡本豊彦等、各一品ツヅ画ク。甚面白モノナリ。然レトモ其秃鷲骨ナルモノ、淇園以天狗頭トス。蘭山先生ハ秃鷲骨トス。今日文化ノ開ケルニ從ヒ、其鯨魚骨タルヲ知ル。亦以時世変遷ヲ知ルニ足ルモノナリ。桃絲竹ナルモノ、実ニ奇品トスヘシ。  
 とあるという。さらに、「秃鷲頭<sup>とくしゅうとうろ</sup>鷲<sup>あずまとうろう</sup>」を東東洋が写生した「秃鷲頭鷲図」について、「秃鷲は詩経や本草綱目にみえる大形の鳥秃鷲。頭鷲は頭骨。百々俊道は師の小野蘭山から鑑定を得ると、画家東洋に写生を頼んだ」と紹介している。
- (20) 「天狗の骨」は、昭和6年10月号の「犯罪公論」に掲載されたもの。『谷崎潤一郎全集』第22巻(中央公論社、昭和43年8月24日刊)所収、298~301頁。
- (21) 『荒俣宏妖怪探偵団 ニッポン見聞録』東北編(荒俣宏・荻野慎諧・峰守ひろかず著、株式会社学研プラス、2017年9月12日刊、80頁)には、地質学・古生物学専門の大石雅之先生の話として、「中尊寺にあるカラス天狗がイルカらしいと聞いて見にいったら、現生のマイルカの頭骨でした」と記されており、マイルカの頭骨とみられる。
- (22) 「トランヴェール」2019年8月号(株式会社ジェイアール東日本企画 トランヴェール編集部編、東日本旅客鉄道株式会社、令和元年8月1日刊)に、峯葉師堂を管理する願成就院の破石澄元住職の話として「いきさつはよく分からないのですが、明治の終わりごろ、当時の住職が珍しいものを集めていたようで、その一つです」と記載されている。そして、峯葉師堂では天狗の爪(ムカシオオホホジロザメの化石とみられる)とともに昭和30年ごろまで寺宝として公開されていたという。
- (23) 中道坊文書には、文化12年(1815)の「宿々村々巡参帳」(横帳、NO11-04)や文化15年(1818)から天保4年(1833)の「立山禅定人留帳」(袋綴、NO11-05)などもあり、このころに越後で活動をおこなっていたことがうかがえる。
- (24) 『岩嶽中道坊官位奉加割帳』は、名苗家文書の一つ(『氷見市史』4・資料編二近世(二)所収、氷見市史編さん委員会編、氷見市、平成15年3月)。同書の資料解説にも「中道坊が官位昇進にかかる費用を氷見庄の南条組・上庄組の村々に依頼し、村ごとの割り当てを葛葉村の新十郎が記録した控え帳である。この氷見庄の村々は、中道坊が檀那場とした区域と推測され、これは立山岩嶽寺の加賀藩領内での活動を示す史料である」と紹介されている。
- (25) 「覚、初穂銀納付控」(切紙3通)、中道坊文書の一つ(個人蔵、NO11-20)。
- (26) 加越能文庫、金沢市立玉川図書館近世史料館蔵。
- (27) 加賀藩領内の加越能三カ国の諸郡と江州今津・海津の産物を記し、元文3年(1738)に書き上げた『郡方産物帳』射水郡・五(加越能文庫、金沢市立玉川図書館近世史料館蔵)には「一、いるか 四季ニとり申候」と記されている。
- (28) 小境卓治「えびす信仰ノート」(『氷見市立博物館年報』第6号所収、氷見市立博物館、昭和63年3月)、49頁。『氷見市史』



第6巻・資料編4 民俗、神社・寺院（氷見市史編さん委員会編、氷見市、平成12年7月刊）、305頁。

- (29) 『特別展 人びとのいとなみと動物たち—生活・文化・信仰—』(氷見市立博物館、平成25年10月16日刊) 32～44頁。
- (30) さらに、同論考(註28)にて「一説には、ニュウドウイルカ(入道海豚)はゴンドウクジラ(巨頭鯨)の異名ともされるが、地蔵町の浜で水揚げされたのが成長個体で体長6～8メートル」におよぶ大型のオキゴンドウやコビレゴンドウ(マゴンドウ)、ヒレナガゴンドウとは考え難い。また、記録に残る大きさからして、約2メートル程度の小型のマイルカやカマイルカでもなく、中型のバンドウイルカであった可能性が高い。さらに、町内各家への1円の配当金とは別に、「曳網の者」たちとよばれる曳網の網主や、あるいは曳網の操業者らに5円ずつの特別配当がなされているのは、この折の漁が台網など定置網での混獲ではなく、岸近くへ群泳してきたニュウドウイルカ(バンドウイルカ)の大群を、当時盛んに操業していた町内の曳網によって水揚げしたからに他ならない。」と述べている。
- (31) 氷見市の朝日貝塚では、出土した哺乳類の骨のなかでも主体となるのがイルカ類で、全体の約60%を占め、さらにイルカ類のうち約77%が外洋性といわれるマイルカとなり、そのほか少数ながらカマイルカやバンドウイルカ(バンドウイルカ)が出土しているという(『特別展 人びとのいとなみと動物たち—生活・文化・信仰—』氷見市立博物館、平成25年10月16日刊、6頁)。また、上久津呂中屋遺跡でも、縄文時代早期後葉から後期前葉までの堆積がみられる貝塚や土器捨て場から大量の動物骨が出土しており、哺乳類の半数を占めるのがクジラ類で、マイルカを主体に、カマイルカ、バンドウイルカ、オキゴンドウ、ハナゴンドウが出土しているという(『特別展 人びとのいとなみと動物たち—生活・文化・信仰—』氷見市立博物館、平成25年10月16日刊、13～14頁)。さらに、大境洞窟遺跡でも平成16年度の調査で、大正7年調査の第6層(縄文時代中期中葉～後期中葉)に対応する層からと、第5層(縄文時代晩期末から弥生時代中期中葉)に対応する層からイルカ類の骨が出土していると紹介されている(『特別展 人びとのいとなみと動物たち—生活・文化・信仰—』氷見市立博物館、平成25年10月16日刊、10頁)。ただし、大半を占めるのはイノシシやニホンジカで、アシカ類やイルカ類などの海棲哺乳類が加わるとある。
- (32) 嘉永元年(1848)の「立山大権現御初穂志記帳」(NO11-12)や嘉永3年(1850)の「石川郡等配札一時見合の件、その他」(NO11-17)、嘉永4年(1851)の「仏奉加施財授納帳」(NO11-18)、嘉永7年(1854)の「石川半郡村々印鑑帳」(NO11-19)などである。すべて、中道坊文書(個人蔵)。
- (33) 「出開扉宿寺請記」(半紙等仮綴4枚)、中道坊文書の一つ(個人蔵、NO21-12)。
- (34) 桜井徳太郎『日本民間信仰論』(雄山閣、昭和33年5月15日刊)、100頁。
- (35) 『能登志徴』森田平治遺稿・下編(石川県図書館協会、昭和13年9月27日刊所収)、388～389頁。能登半島のイルカの民俗については、中村羊一郎『イルカと日本人 追い込み漁の歴史と民俗』(吉川弘文館、2017年2月1日刊)を主に参照した。
- (36) 獅子岩について、「文化十四年[1817]郡方書上帳に、獅子岩は文化十一年[1814]秋崩損し、只今は根石までに相成とあり」と記されており(註35に同じ)、文化11年(1814)秋に崩壊し、今は根石までになっているという。
- (37) 高倉神社は石川県鳳至郡能登町字真脇にあり、海岸近くの高台に鎮座する。高倉神社近くの、縄文時代前期半ばごろから晩期に至る真脇遺跡(石川県鳳至郡能登町字真脇)でも、イルカの骨が大量に出土しているという。真脇遺跡は富山湾に臨み、三方を丘陵に囲まれた小さな入り江の奥の沖積平野に位置する。「能登志徴」巻9の真脇高倉神社の項(『能登志徴』森田平治遺稿・下編、300～301頁)には、
- 貞享二年由来書に、能州珠洲郡真脇村高倉権現者、同郡珠洲神社を勧請仕由申伝候。開闢之義者知不<sub>レ</sub>申候。云々。社地之義、最前土方領と御分領と入合之地にて、土方領近年御公領に罷成申候。大社地之義者先規之通りに御座候。云々と載せられたれば、其かみ三崎高倉彦神を勧請せし社にて、往古は三崎の撰社なるべし。然るを元禄二年六月七日の吉田許状に、當社神主高原氏、高倉神社神主職と載せたるよりこのかたは、三代実録に見えたる高倉彦神は此神社なりとて、代々吉田許状を請来れども、此は元禄以来の事にて、證とするに足らず。
- と紹介されている。また、「能登志徴」巻10の珠洲郡・須々神社の項(『能登志徴』森田平治遺稿・下編、368頁)にも、真脇村の高倉権現は三崎の珠洲神社(須々神社)より勧請したものと、先と同じような内容が記されている。
- (38) 『能登志徴』森田平治遺稿・下編(前掲書)、301頁。
- (39) 註15に同じ。
- (40) 註15を検索すると、1986年(昭和61年)3月17日に富山県滑川市沖青掛定置網と、2005年(平成17年)4月7日に石川県七尾市能登島鰻目町沖で発見されていることがわかる。
- (41) 木内石亭著『雲根志』後編三之上(富山県立図書館蔵)。